

災害文化遺産の展示手法と防災教育への活用

— 禹王遺跡展の事例から —

Exhibition of Disaster Cultural Heritage and Application to Education on Disaster Prevention:
A Case of Exhibition of Yu Wang as God of Flood Control in Japan

大邑潤三¹・片山正彦²・谷端郷³

Junzo Ohmura, Masahiko Katayama and Go Tanibata

¹京都大学防災研究所研究員 地震予知研究センター (〒611-0011 宇治市五ヶ庄)

Researcher, Disaster Prevention Research Institute Kyoto University, Research Center For Earthquake Prediction

²市立枚方宿鍵屋資料館学芸員 (〒573-0057枚方市堤町10-27)

The Curator at Kagiya Museum

³立命館大学専門研究員 衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58番地)

Post Doctoral Fellow, Kinugasa Research Organization, Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University

The rotating exhibit Cultural Heritage of Disaster, The Remains of Yu wang in Japan and its Belief in God of Flood Control was held from March to May 2018 at the Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage Ritsumeikan University. Many people looked at this exhibit and 148 people answered a questionnaire about this exhibit. The results of analysis of the questionnaire indicate that Yu wang the Great as the god of flood control is not only a symbol of local culture but also a useful figure for education on disaster prevention.

Keywords: cultural heritage of disaster, exhibition, disaster Education, remains of Yu Wang

1. はじめに

2011年の東北地方太平洋沖地震以降、津波碑などの過去の災害に関する遺跡が注目され、災害の記憶を継承するために、地域に石碑などの形で残る災害に関する文化遺産を改めて見直し、保存しようという機運が高まっている¹⁾。政府においても地震や津波などに遭った建物、状況を記録した石碑や文献を災害遺産として選定するなどの動きがみられた。

こうした災害遺跡のひとつとして禹王遺跡が挙げられる。中国古代の伝説的皇帝である禹王の黄河治水を由来として、日本国内にも約130ヶ所²⁾の禹王遺跡が確認されており、この中には水害や治水事業に関する遺跡が多い。こうした経緯から立命館大学歴史都市防災研究所展示ルームにおいて「災害文化遺産 日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展」(2018年3月16日～5月16日)が開催された。本展示は現在では日本人から忘れ去られた禹王遺跡とその治水神信仰の実態を初めて総合的に展示する試みであり、これまで歴史学や民俗学、災害科学などで取り上げられることのなかった、禹王遺跡の意義や地域文化としての重要性を示し、災害(防災)教育に利用できる地域の貴重な文化遺産である事を示すことが目的であった。

本稿では展示の報告という形をとりながら、地域に残る災害文化遺産をどのように社会に周知し活用すればよいか、その課題と今後の展望を述べる。

2. 展示施設概要

(1) 展示スペースの概要

立命館大学歴史都市防災研究所1階には、「研究成果や事業内容、所蔵資料の一般市民に向けた公開展示」（研究所パンフレットより）を目的に112.6㎡の展示スペースがある。壁にはパネルを設置できる仕様が施されているほか、移動式展示ラック4台、ガラス戸2か所、ガラスケース2台、視窓型展示ケース4台が備わっている。ガラス戸、ガラスケース、視窓型展示ケースには鍵がかけられることから、貴重資料の展示が可能である。なお、ガラスケースの中の湿度管理は、温湿度計と乾湿剤で行っている。照明は、調光可能なダウンライトと、天井に設置されたライティングレールにスポットライトを適宜取り付けて明るさを調整している。防犯対策としては、展示スペースの入り口に事務局の窓口があって見学者の出入りを確認しているほか、防犯カメラも設置されている。

(2) 過去の展示

展示スペースにおける過去3年間の企画展の実績をみると、4～8月が歴史都市防災研究所の研究成果の展示、9・10月は国際研修プログラム（ITC）の実施に合わせてこれまでの活動を紹介する展示、11・12月は研究所主催の「地域の安全安心マップコンテスト」優秀作品の展示、1～3月は研究所の所蔵資料を展示する「歴防コレクション展」が開催されてきた。「歴防コレクション展」では、市民用消火栓やアライグマの剥製など研究成果や研究対象の理解を助ける実物展示に加え、かわら版や絵葉書など研究所で所蔵されている災害を伝える歴史資料が出展されている。このように研究所の企画展は、研究所の取り組みの紹介や研究成果の発表の場に供されてきた。また、展示スペースの使用が開始された2006年以降、「地図を通してみる関東大震災展」（2009年4月8日～5月10日）、「史料で再現する（過去の）大災害」（2011年1月11日～3月31日）、「丹後震災85周年記念特別展in Kyoto」（2012年4月16日～5月25日）、「幕末三都の火災」（2012年5月29日～7月9日）、「本物の新聞号外で見る災害」（2013年3月5日～5月14日）など主に歴史災害に関わる企画展も随時行われてきた。とくに、「地図を通してみる関東大震災展」や「丹後震災85周年記念特別展in Kyoto」、「本物の新聞号外で見る災害」は、他機関や個人との連携によって展示が行われたものである。今回は、ほぼ5年ぶりに開催された他機関との連携による企画展である。

(3) 過去の見学者数

研究所の事務局で把握している月別見学者数の推移をみると（図1）、この約3年間（2015年7月～2018年2月）でおよそ1,300人を見学者があり、月最多は2016年12月の83人、最少は2016年3月と2017年5月の16人、平均は46.4人であった。平日のみの開館であるため、多くを見学者を見込めないが、月別に見ると、4月や8月、10月が多い。これは、教員により展示見学を勧められた新入生、ITCの参加者、マップコンテスト入賞者によるものと考えられる。また、団体の施設見学が不定期にあり、その場合に見学者数が上乗せされる。普段は、研究所所属教員との打ち合わせなどを目的に来館する者が時間の調整で見学する場合が多い。

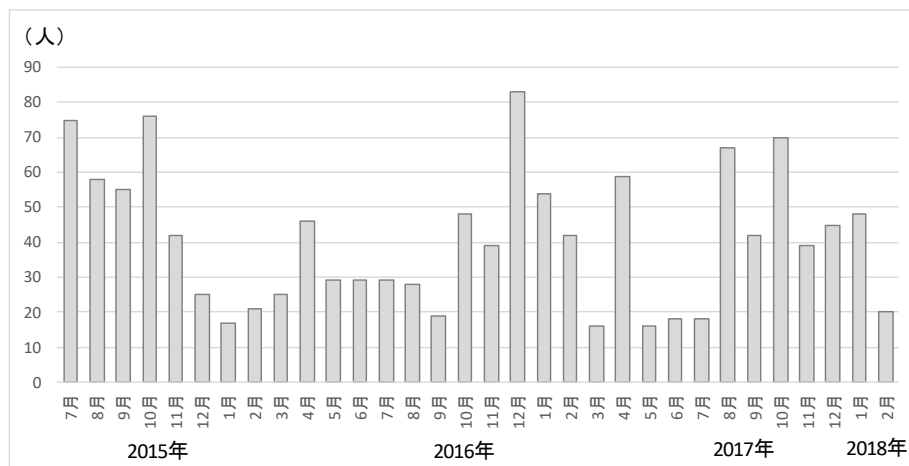


図1 月別見学者数の推移

※土日祝日のほか夏休み・冬休み期間中に各10日間ほど休館日が設けられている

(4) 企画展開始後の見学者数と告知のあり方

今回の企画展が開始された2018年3月の見学者数は81人（うち本企画展が開始された16日以降は69人）、4月は199人であった。通常、研究所企画展の告知・案内は研究所前や大学正門前の掲示板、研究所HP内（<http://r-dmuch.jp/jp/exhibit/index.html>）で行われている。今回は、これらの方法に加え、B4版ポスター、A4版チラシ、はがき、治水神・禹王研究会の会報での案内、新聞報道等による告知・案内が行われた。また、治水神・禹王研究会の年次総会が4月13日に立命館大学で開催され、その出席者約50人も展示を見学した。さらに、展示関係者の担当する大学の授業において、本企画展の見学を課題としたこともあり、多数の学生が見学に来た。このように他機関との連携による企画展の開催により、通常よりも大幅に見学者数が増加したことから、今回の企画展が研究所の周知にも大きく寄与したと考えられる。

3. 展示計画および展示における問題点と今後の課題

(1) 展示計画

本展示は、2017年11月ごろ、佛教大学名誉教授植村善博氏の発案のもと、大邑・谷端・片山の4名が展示計画を立てることとなった。展示計画は数回の議論を植村氏宅にて行い、展示内容や役割分担を詰めていくこととなったが、この過程で東海地域は海津市歴史民俗資料館の水谷容子氏、関東地域は治水神・禹王研究会の大脇良夫氏・関口康弘氏に展示を担当していただくこととなった。

片山は自身の勤務先（市立枚方宿鍵屋資料館）において淀川洪水に関する企画展を開催した経験があることから、植村氏宅にて行った議論に基づいて、2017年12月15日付で本展示の「展示案」を作成した。この後、さらに議論を重ねて作成された展示計画が表1である。おおむねの役割分担については、植村氏は日本および東アジアの禹王遺跡・禹王文化、谷端は京都における禹王遺跡と伝説、大邑はプロジェクトマッピング、片山は淀川流域の禹王遺跡と水害、水谷氏は濃尾平野および海津市の禹王遺跡、大脇氏・関口氏は神奈川県酒匂川の文命（禹王）遺跡となった。ただし展示資料については、これまで歴史都市防災研究所が外部から資料を貸借することが少なかったことから、研究所が所蔵するもの、および外部の資料については展示許可のいただけるもの数点となった。また常勤の学芸員がいないため、セキュリティや温湿度管理などの問題も明らかになった。

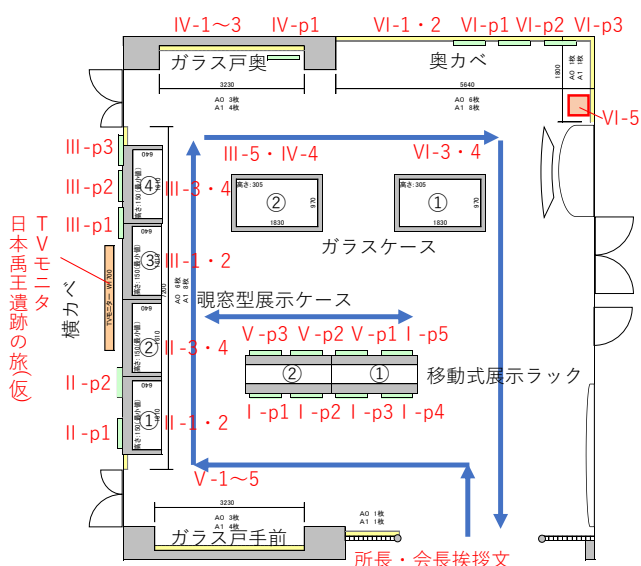


図2 当初予定の配置 (2月27日段階)

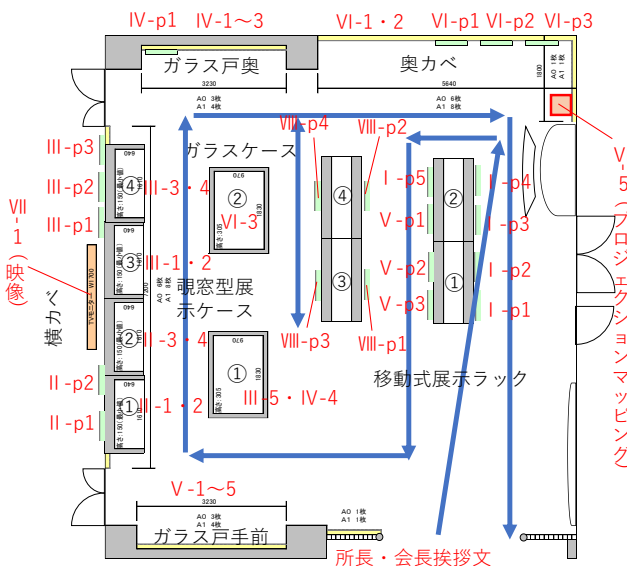


図3 実際の配置 (3月21日段階)

(2) 展示における問題点と今後の課題

当初は来館者の動線を鑑みて、おおむね時計回りとなる図2のように陳列したかったが、セキュリティ上、入口や事務局からの視界を確保する必要があったため、最終的には図3のように陳列することとなった。

たとえば「淀川流域の禹王遺跡と水害」についていえば、展示資料Ⅳ-1～3は固定展示ケースに設置することとなったが、Ⅳ-4のみ移動式展示ラックに設置することとなり、来館者が混乱するのではないかと考えられた。アンケート結果によれば、今のところ（4月末日現在）多少陳列に関する指摘はあったようである。常駐の学芸員がいれば、そのような指摘への対応も可能であったのではないかと考える。

以上、本展示における展示計画および実際に資料を展示するにあたっての問題点と今後の課題を指摘した。紙幅も限られていることから指摘しきれていない点もあるが、実際に本展示を開催したことにより、研究所における展示についての改善点もみえてきたのではないと思う。今後、本展示を契機として、研究所がより良く活用されることを期待したい。

表1 「災害文化遺産 日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展」企画案

事業名称	「災害文化遺産 日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰」
実施主体	立命館大学歴史都市防災研究所・治水神・禹王研究会（共催）
日時	2018年3月16日（金曜日）～5月16日（水曜日） 開館9：30～17：00（土・日・祝日は休館）
場所	立命館大学歴史都市防災研究所展示ルーム（603-8341京都市北区小松原北町58）
目的	中国の伝説的聖人君主や治水英雄として有名な禹王が治水神として日本に輸入され、水害常習地や災害被災地の人々に深く信仰されてきた。近代治水事業でも禹王の事績が頻繁に利用・宣伝されている。現在では日本人から忘れ去られた禹王遺跡とその治水神信仰の実態を初めて総合的に展示する。日本各地における130カ所の遺跡から、代表的な地域を取り上げ禹王遺跡の分布や特徴、地域の歴史や災害史、河川や治水事業との関わりを明らかにする。また、中国、台湾、朝鮮半島などの禹王遺跡を紹介し、東アジアにおける禹王遺跡と禹王信仰について展示し、東アジアにおける禹王信仰と禹王文化について比較、検討する。これまで歴史学や民俗学、災害科学などで取り上げられることのなかった禹王遺跡の意義や地域文化としての重要性を示すとともに、災害教育に利用できる地域の貴重な文化遺産である事を示す。
展示内容	禹王遺跡と治水神としての禹王信仰に関連する資料を地域別に展示する。 ① 日本および中国、台湾や朝鮮半島など東アジアにおける禹王遺跡の特徴を展示する。 ② 鴨川・桂川：鴨川・桂川によって形成された京都盆地を中心とした展示。日本で最初に禹王廟が鴨川に建立された。鴨川古図、名所図会、絵葉書、古写真など。 ③ 淀川：商都大阪とその周辺を中心とした展示。淀川河岸には大水害に関係した禹王遺跡が多数分布する。明治18年淀川大洪水の絵巻物（立命館大学歴史都市防災研究所）、澱河洪水記念碑銘拓本・明治18年洪水碑拓本（守口文庫）、沖野忠雄関係文書（淀川資料館）など。 ④ 濃尾平野および高須輪中：水害常襲地域をもつ濃尾平野を取り上げ、とくに禹王遺跡や資料が多数のこる高須輪中について展示する。禹王木像（海津市資料館）など。 ⑤ 神奈川県酒匂川：富士山宝永噴火により凄惨な被災地となった酒匂川流域を取り上げる。治水事業と復興に取り組んだ田中休愚の事績を中心に、文命（禹王）に関連する遺跡と現在につづく祭礼を紹介する。 ⑥ 日本の代表的な遺跡を「日本禹王遺跡の旅」として映写する。
入館料	無料
広報	各博物館・資料館・研究者などに周知する案内状を発送する。また、ポスターを製作する。展示内容および出品目録を図録として作成・印刷する。
予算	・キャプション作成費：インク、紙、貼パネなど ・資料借用等経費：借用にかかる交通・運送費、送料、保険、手土産代など ・広報宣伝費：ポスター・チラシ・出品目録・図録等にかかる費用および送料

4. アンケート結果

本展示では見学者の傾向や意見を収集するためにアンケートを実施した。本展示用に作成したパンフレットに挟み込む形で見学者に配布し、見学後に記入してもらう形をとった。回収されたアンケートは148件であり、打刻したナンバーなどから回収率は37%である（4月末時点）。ここではアンケートの質問項目13件について結果の分析を行う（図4）。

(1) 見学者の傾向（年代・地域・職業・告知）

見学者の年代は10代（30人・20%）、20代（57人・39%）が圧倒的に多い。これは展示関係者が受け持つ大学の授業で本展示を紹介し、見学の上アンケートの提出を求めたことによるものである。職業も学生が87人・59%であり10代、20代の見学者はほぼ大学生と考えられる。次いで60代（21人・14%）、70代（24人・16%）が多い傾向にあるが、これは会期中に治水神・禹王研究会の研究大会が開催され、展示の説明・見学会が行われたことが要因として大きい。職業の無職（24人・16%）・その他（19人・13%）はほぼこれに該当すると考えられる。また展示関係者による知人等への案内がこの年齢層に多かったことも一因だろう。

一方で、30代（2人・1%）、40代（6人・4%）、50代（6人・4%）と現役世代の見学者が著しく低い。これはこの年齢層の興味関心が低いこともあげられるが、展示ルームが土日祝日に開場しておらず、現役世代は平日に訪れにくいことが大きな原因であると考えられる。

見学者の住む地域は京都市内（64人・43%）が圧倒的に多い。開催地が京都市であることから当然の結果であるが、学生の多くが京都市内や大阪府（25人・17%）、京都府下（12人・8%）、滋賀県（8人・5%）に該当するためと思われる。京都市内および大阪府の見学者のうち、学生の比率はそれぞれ73%と64%であり、滋賀県の見学者はすべて学生であった。

またその他（25人・17%）も多い傾向にある。これらはその多くが神奈川県と愛知県に集中しており、研究会のメンバーやその紹介によるものと考えられる。また禹王遺跡が存在する香川県高松市や大分県臼杵市からの参加もあり研究会関係者と考えられる。

次に何によって本展示を知ったかだが、前述のように大学の授業での紹介（86人・58%）が圧倒的であった。全体的にみても、知人（＝展示関係者と思われる）（32人・22%）、研究会（14人・9%）、ハガキ（3人・2%）などの関係者経由が多かった。会期中に京都新聞および読売新聞に紹介記事が掲載されたが、新聞報道が動機となったのは5人・3%で、この中には学生もみられた。ポスター（＝チラシを含むと思われる）（3人・2%）、その他（3人・2%）も少ない。しかし関係者以外の一般見学者は、ほとんどアンケートを書いていないこともあり、このデータから新聞・チラシ・ポスターでの告知の効果を判断するのは難しいといえる。一方、たまたま前を通りかかって見学した例（2人・1%）もみられた。

(2) 展示の効果（事前の認知度・見学後の理解度・満足度・興味）

日本において本展示のテーマである禹王はほとんど認知されていないことから、見学者が事前に禹王を知っていたかを確認したところ、はい（51人・34%）、いいえ（97人・66%）であった。ここから研究会関係者を除いた場合、8割以上が禹王を知らなかったと考えて良い。

これに対して見学後の禹王や治水神信仰に対する理解の深まりをたずねたところ、はい（139人・93%）、いいえ（6人・4%）、その他・未記入（4人・2%）と大多数に理解の深まりがみられた。また展示に対する満足度も同じ傾向がみられ、満足（139人・93%）、不満（4人・3%）、未記入（6人・4%）という結果だった。

見学者が興味関心を持ったテーマ（複数回答可：全153件）としては、京都（32件・21%）が最も多い。京都市内および京都府下からの見学者が半分を占めるため自然な結果であるといえるが、「なにげなく通っている場所が禹王遺跡と知ることができた」など生活圏において新しい発見ができたという意見がみられた。それ以外の各テーマは濃尾平野（21件・14%）、東アジア（18件・12%）、文化（15件・10%）、淀川（12件・8%）、酒匂川（11件・7%）、それ以外の地域（8件・5%）、全般（7件・5%）など比較的均一に興味を持たれたといえ、展示のバランスとしても良かったと考えられる。主なテーマとして取り上げなかった地域を解答に挙げた例は、自身の地元や縁のある地域であるとする場合が多かった。

(3) 遺跡の価値の認識と活用法

禹王遺跡に遺産としての価値があるかという問いでは、非常にある（54人・36％）、ある（92人・62％）、ない（0人・0％）、わからない（2人・1％）と、価値があるとする意見が98％と圧倒的であった。それをうけて遺跡をどのように利用・活用すればよいか（複数回答可：全231件）をたずねたところ、地域の歴史（74件・32％）、災害史の記憶の伝承（65件・28％）、防災教育（44件・19％）、河川や治水（26件・11％）、地域の活性化（18件・8％）という結果となった。大別すると災害・防災に関するものが6割、地域に関するものが4割と、防災面への活用を主張する声が大いといえる。しかし年齢別で比較すると、若年層は地域の歴史への活用を、高齢者は河川や治水への活用を望む傾向がそれぞれに対して倍程度多いことがわかった。若年層よりも高齢者の方が防災面への意識が強いという傾向が出た。

次に具体的な活用方法について自由記述でたずねた。防災関係では「人間と自然との戦い（関わり）」として紹介する」「地域防災に技術面（ハード）だけでなく信仰（ソフト）も情操として組み込む」「災害史の伝承装置とする」「防災ツアーなどで遺跡に赴いて紹介する」「防災訓練時に活用」などの意見が多かった。また地域に関連するものとしては、「日中文化交流」「観光資源として地域活性化」「各地で展示会を行う」「案内板を設置し目立つようにする」「お祭りなどのイベントを開催する」「遺跡の立地する各自治体で連携し情報発信していく」「再発見を進め地図化する」「普段私達が何気なく目にする石碑や遺跡には意味があり、それが残る背景も一つ一つにあるのだと感じた。このストーリーを紐解くことでさらに地域に興味がわき、地方創生につながるのだと思った」など文化遺産としての側面を活用すべきとの意見がみられた。

さらにこれらと関連する形で教育への活用を主張する意見が多くみられたのが特徴的であった。具体的には「教育関係者に周知する」「中高生に展示（本展示）を見学させる」「歴史教育の教材に」「講演会を開いたり学校の授業で扱う」「遺跡の保護のためにも教育に活用し学生とコラボする」「地域の総合学習や生涯教育を視野に入れた大学発のメディアミックス」「もっと若者に知ってもらわなければならない」「学校で防災教育の一環として地域の災害史を取り上げる」などであった。

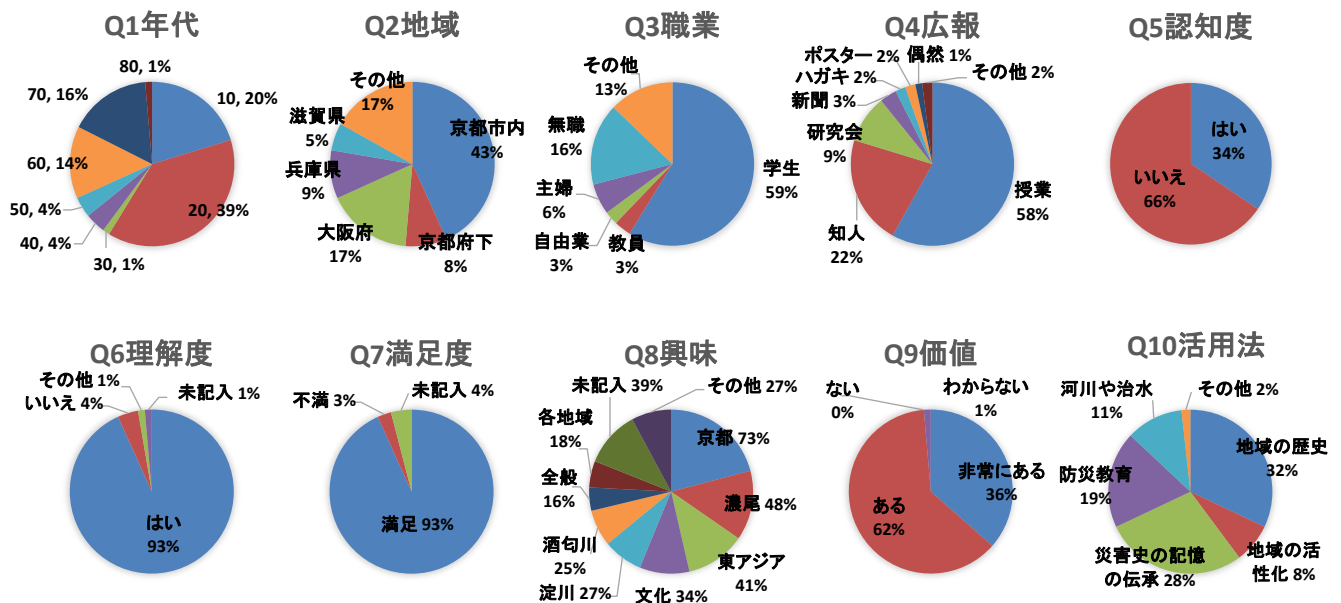


図4 アンケート結果

(4) 展示内容・展示方法への感想

展示に関する意見は肯定的なものが多かった。「予備知識はなかったが理解しやすかった」「海外（東アジア）の情報や中国の研究成果も展示されていた」「パンフレットは分かりやすく、読みながら見学でき、帰宅後も見返せるので良い」「ギャラリートークがあって楽しかった」「ちょうど良い規模の展示で内容も思ったより立派だった」「内容が多岐にわたり充実していた」「パネルと現物のバランスが良い」「詳しい解説があり、それを補強する多数の史料があった。高い情報量をすんなり浸透させた」などである。施設に関

しても「入り口から入ってすぐ展示が見えるのがよい」「他にも色々展示してください」「施設が美しく設備も最新」「新入生の施設見学に良い」といった感想がみられた。

特に実物が展示されている事への反響が大きく、貴重な展示品が見学できたとして、禹王木像や拓本に注目する声がみられた。また地形模型に映像を投影したプロジェクション・マッピングに関しては「とても印象に残った」「模型と音声と映像でわかりやすかった」などの声が多数あり、主に若年層を中心に人気があった。

一方、否定的な意見もみられた。展示全般や施設関係として「研究所の前を通っても展示をしていることが分からない。せっかくなのでもっと目立たせるべき」「もっと宣伝をしていくべき」「場所がわかりにくい」「駐輪スペースを探してしまった」「土日でも開けてほしい」などである。展示方法としては「思っていたのと違った」「禹王遺跡をなかなか理解しにくい」「そもそもの禹王について等の説明が少なかった」「信仰や定着の伝播過程がわかるような展示があればなお良い」「動線が悪く指示順路がない」「説明文の字が小さく行間も狭いため読みにくい」「漢字にフリガナがない」「万人うけしない」「規模が小さい」「興味を抱けなかった」「期待はずれだった」「ターゲット層が不明」「レクリエーションの要素も取り入れた方が良い」「大人だけでなく小中学生向けの展示にすれば良い」などの意見がみられた。

(5) 見学者への影響

本展示が見学者へ与えた効果については上述したが、具体的なものがアンケートの感想中に散見された。展示全体としては、「新しい知識として興味深く、自分でも調べてみたいと思った」「知らなかった事が勉強でき見識が広がった」「文化面での大陸とのつながりを感じた」「授業での紹介であったが禹王を知る良い機会となった」「正直なところ最初は興味がなかったが、ちょっとおもしろかった」など積極的な見学でなくとも、見学後には満足感を得られたとの解答があった。

さらに防災面での効果として「淀川洪水を祖父から聞いていたが興味や理解が深まった」「（自分は）消防団に参加しており災害文化遺産について詳しく調べてみたいと思った」「治水神という存在に頼らなければならなかったほど困っていたことがわかった」「海津に縁があり水害が多いことを知っていたが、中国の禹王が日本に伝わり水害に対する信仰として定着していたのは驚きだった」「災害文化遺産を大切にし、多くの人に知ってもらいたい。遺産としての価値の高さを感じた」など過去の水害への興味や災害遺産としての遺跡への感心、価値の認識が高まった例がみられた。

5. 防災および地域活性化への活用の可能性と展望

禹王遺跡の特徴は災害遺産と文化遺産の両方の性質も持っていることである。アンケート結果にもみられたように、災害遺産であれば防災（教育）への活用、文化遺産であれば文化交流や地域活性化などが挙げられる。しかし、このような多様な側面を有していることが禹王遺跡の最大の強みである。アンケートにも「禹王のひとつの側面だけでなく多様な禹王が存在していることを示すことが極めて重要」「（アンケートで活用方法として挙げた選択肢について）どれも奥でつながっており、その根本に至ればあらゆる障壁はなくなる」との意見がみられた。

展示中で多くの興味を持たれたもののひとつに、現在でも行われている禹王に関する祭礼が挙げられる。酒匂川福澤神社において現在も堤防上で行われている祭礼が良い例だが、エンターテイメントと防災を結びつける方法の有効性は指摘されている³⁾。禹王に関連させたイベントを通じて地域の防災意識の向上をはかるやり方は、多様な側面を有する禹王遺跡ならではの方法であり、今後の活用方法のひとつとして福澤神社や紹興市⁴⁾の例を参考にすべきである。禹王はある種のマスコット・キャラクターであり、難しく漠然としたイメージをもたれがちな防災に適用することで良い効果が期待できる。

大きな課題としては、取り扱うテーマが一般的ではなく娯楽性を持たないために、防災への強い意識や中国文化への感心を持つ市民でなければ、積極的な参加が見込めないことである。しかし見学後の満足度は高いことから、いかにして会場に足を運んでもらうかが重要である。そこで10～20代の学生に対して防災教育・地域学習などで見学する機会を設けることが有効であると考え。先述のように本テーマは見学者の興味関心をひき、学習意欲を引き起こさせる効果がみとめられ、教育現場における防災教育・地域学習といった総合的な学習の教材として最適である。今後若年層をターゲットとする場合には、若者向けの視覚にうつ

たえる展示や、体験型の展示の検討、説明パネルの改良、告知の見直し、会期中に遺跡ツアーを開催するなど、本展示で得た意見や課題を活かす必要がある。

一方で「利用・活用の前に認知してもらう必要があると思う」との意見があったように、禹王遺跡はまだ社会に認知されていないのが現実である。今回のような展示を継続して行うことや、展示・講演活動を全国各地に展開していくことで禹王遺跡の認知度が上がり、防災・地域活性化の両面で社会に貢献できる。本展示の主催者でもある治水神・禹王研究会は全国に会員がおり、各地域で取り組みを行うことは困難ではない。そのためには研究会の活動として禹王遺跡の基礎情報をまとめたパンフレットや映像の作成、ノウハウの構築と提供などを積極的に行っていくべきである。最後にこれらの活用方策や課題は、禹王遺跡に限定されない他の災害遺産や文化遺産に共通する事項であることを強調しておきたい。

6. おわりに

本展示のアンケート分析を通じて以下の点があきらかになった。

1. 歴史都市防災研究所で開催された本展示は、開催期間2か月のうち約4分3が終了した4月末時点で300名弱が見学し、おおむね好評であった。本展示により見学者の関心が高まるなどの良い影響がみられ、日本で認知されていない禹王遺跡を周知して理解してもらい、地域文化や防災における遺跡の価値を認識してもらうという本展示の目的は達成されたといえる。
2. 日本での禹王遺跡の認知度の低さや、災害・防災という敷居の高いテーマ、展示会場に従来の固定客がほばいないなどの事情もあり、関係者以外の見学者は少なかった。こうした展示の継続開催や各地への展開など、今後も周知活動が必要である。これには明らかになった課題の克服とノウハウの蓄積や提供が必要である。
3. 一般市民の積極的な参加が限定される防災などのテーマを扱う企画展では、防災教育と地域学習をからめて学生に紹介するなど、動員に対して工夫が必要である。周知を行う対象としても今後の社会を担う若年層をターゲットにする意味は大きく、防災や地域活性化への効果が期待できる。
4. 一般人の積極的な参加が見込めないテーマ、あるいは若年層をターゲットにする場合、展示には工夫が必要である。本展示では若者を中心として映像や音声、模型などの視覚に訴える展示が効果的であった。また関係者によるギャラリートーク、カラー刷りのパンフレットは好評であった。特にパネルだけではなく木像や拓本などの実物の展示がなされた効果は大きかった。これらにより本展示の満足度は総じて高かったといえる。しかしそれらの貴重品を展示するにあたっていくつかの課題も明らかになった。
5. 禹王遺跡の活用方法についての意見は、災害遺産に関するものと文化遺産に関するものに大別され、防災面への活用を主張する意見が6割をしめた。しかしこの2つの側面は不可分のものであり、セットで打ち出していくべきとの意見がみられた。これを具体的に示すものとして、防災教育や地域学習、総合学習など学校教育の場で活用すべきとの意見が目立った。
6. 様々な側面を持つ禹王遺跡は防災や地域活性化の面で利用価値があり、防災とイベントとの組み合わせで相乗効果を上げるなど、大きな可能性を持っていると考えられる。本展示および報告では事例として禹王遺跡を扱ったが、一般的な災害遺産や文化遺産にあてはまる部分も少なくない。地域に存在する災害遺産や文化遺産によって防災や地域活性化を推進していく場合、本事例は多くの示唆を与えるものであると考える。

参考文献

- 1) 国立民族学博物館 津波の記憶を刻む文化遺産 ―寺社・石碑データベース― <http://sekihi.minpaku.ac.jp/> など
- 2) 治水神・禹王研究会禹王遺跡認定委員会編：日本禹王遺跡一覧，治水神・禹王研究会誌，No.5，pp.76-79，2018.
- 3) 内閣府防災情報のページ 特集 心をつかんで広げよう テーマ1 防災への関心を高めるには？
http://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h21/07/special_02.html （2018年5月5日閲覧）
- 4) 紹興市HP http://www.sx.gov.cn/art/2018/4/20/art_12023_1232063.html （2018年5月5日閲覧） 中華人民共和国紹興市では公祭大禹陵典礼が毎年行われており、関連して治水に功績のあった団体・個人の表彰式などが行われる。